

第九回

琉球・中国交渉史に
関するシンポジウム

論文集



王 澈 氏



郭 美蘭 氏



倪 暁一 氏



李 中勇 氏



上里 賢一 氏



生田 滋 氏



吉永 浩吉・田中 聖之



首里城前にて



沖縄県立博物館・美術館 前庭にて

第九回シンポジウムの開催にあたって

沖縄県教育委員会教育長 金 武 正 八 郎

本日、「第九回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」の開催にあたり、沖縄県教育委員会を代表いたしましたして、ごあいさつを申し上げます。

沖縄県と中国とは、一三七二年に琉球国王が中国の明朝に進貢をはじめてから、一八七九年の廃藩置県に到るまで五〇〇余年にわたる長い交流の歴史があります。琉球国は中国との冊封・朝貢関係を軸にして、中国から多くのものを学び、大きな影響を受けて独自の文化を創りあげ、発展させてきました。

一九八九年から沖縄県教育委員会が編集刊行している『歴代宝案』は、一四二四年から一八六七年まで四四四年にわたる琉球王国の外交文書が収録されています。中国でいうと、明朝・清朝の時代にあたります。一方、北京の中国第一歴史檔案館には清代の琉球関係檔案史料が所蔵されています。この檔案史料と『歴代宝案』に収録される文書とは相互に関連する史料です。この檔案史料をきっかけに、檔案館と学術交流をおこなうことになりました。

一九九一年三月、沖縄県教育委員会は中国第一歴史檔案館と学術交流に関する覚書を結びました。以後一九九六年、一九九八年、二〇〇三年と継続して覚書・協議書を交わし、今年で十八年目を迎えました。この間、中国第一

歴史檔案館から沖縄県教育委員会にご提供いただいた三三三〇〇件余におよぶ琉球関係檔案史料は、『歴代宝案』編集刊行に大いに利用させていただいております。

私たちはこの十八年間、沖縄側の『歴代宝案』編集刊行、中国側の『清代中琉関係檔案選編』等の編集刊行、および琉球関係檔案史料の発掘、研究者の交流、シンポジウムの開催、シンポジウム論文集の編集刊行等の成果を通して、琉球・日本・中国さらに東アジア交渉史の研究の発展に大きく貢献し、いろいろな視点から中琉歴史関係を理解することができるようになったと確信しております。

このシンポジウムは、学術交流の覚書・協議書に基づき、沖縄と北京で交互に開催されるもので、今回で第九回目となります。本日のシンポジウムでは、中国側から中国第一歴史檔案館の郭美蘭女士、王澈女士、倪曉一女士、李中勇氏の四名、沖縄側からは歴代宝案編集委員会委員の大東文化大学名誉教授生田滋先生と琉球大学教授上里賢一先生の二名がそれぞれのご専門の立場から、そして新たな視点から報告をおこないます。

ところで、今年は一六〇九年の薩摩藩の琉球侵攻から四〇〇年、明治政府による廢藩置県から一三〇年という節目の年にあたります。この二つはともに琉球国が中国との新たな関係作りを求められた出来事だったといえます。この節目の年に日中の研究者が一堂に会し、発表討論がおこなわれることは非常に意義深いことであります。琉球と中国の交渉史に関する共通理解を深め、また新たな成果が明らかにされるだろうと期待しております。

最後になりましたが、本シンポジウムの成功を祈念申し上げます、あいさついたします。

平成二十一年（二〇〇九）十月十八日